

自身の人生をかけて生涯で何をなすのか！

次の時代を担う“指導者”になるための人物修養法＜学問の入り口編＞

自身に潜んでいる可能性(DNA)を自身で発見する！

ちまたにあるリーダーシップ研修は、何度受講しても真の指導者は、決して生まれません。それは、人としての本質的要素(道徳性)を修養せずに、その付属的要素である会社経営のための知識や技術・技能に終始しているからです。

大学等での経営学やMBAなどの内容は、その付属的要素の習得です。

人としての本質的要素の修養で自身の人格を「見識」、そして「胆識」へと向上させることで、自ずとリーダーに相応しい人物になるものです。

指導者の絶対的要素は、人徳や人望・人格の有無です。

人としての本質的要素の修養に不可欠な“学問”を中心にした“後継者や次世代層の育成”を行っている企業は、無に等しい。

また、人の採用において、人柄(人物性)を重視しながらも、採用後は即戦力化のために、その付属的要素である会社の知識や技術・技能を習得させることは、人材養成であり、人物育成ではありません。

“人物修養法＜入り口編＞”は、単なるセミナーや勉強会ではありません。知識や技術・技能が豊富な後継者や次世代層が、自身の人としての本質的要素の修得不足を痛感しながらも、自身に潜んでいる可能性(DNA)を引き出すための気付きの場です。

そのため、参加に際しては“書籍「運命を創る」<著者：安岡正篤>”(裏面参照)の必読を絶対条件にしております。

確認・検討内容

第1部 自身に潜んでいる可能性を芽生えさせる

- 1.“人”としての本質的要素と付属的要素
2. 明治時代の近代化への根本は、徳川幕府にあり
3. 自身の可能性を計る(国は一人を以って興り…)
4. 立志(志とは/立志の例/項羽と劉邦…)
5. 人物如何(正道/政治と政/大人と小人…)
6. 知識・見識・胆識

第2部 自身が“人物”になるための修養法
～ 人物育成の概要と修養手順 ～

＜開催要項＞

時間 4時間

定員 少人数制

3～5名程度がベストです。

書籍は、各自購入願います。

東京圏以外は、別途交通費負担をお願いします。

運命を創る（プレジデント社）

大体において、創業者(初代)は総じて顕著なことは、気魄が旺盛である。

この気魄は、人の根本的要素であり、人格の第一次的要素でもある。

気魄から生まれる理想を『志』という。

志は、熱烈な理想をもって事に当たるもので、単なる一時的なものではなく、一貫性、永久性がある。

志からの事に当たる際、様々な問題や障害にぶつかり、心折れたり、くじけたりせずに進むこと、人としてこれくらいを根本になくしてはならない。

人は、様々な経験から知識ができてくる。

単なる知識ではなく、本当の全人格的な人そのものを打ち出すことにならなければいけない。

これを『見識』または『識見』という。知識のある人ではなく、『見識』のある人にならなければいけない。

事に当たり、様々な矛盾や抵抗に鍛えられ、きびきびした実行力になった時、これを『胆識』という。

経営者は、この『胆識』をもたなければならない。

修養によって知識も見識となり、その人独特の存在が意義づけられてくる。

根本精神から生まれ出る識見、器量、信念、徳望こそが大事なのである。知識云々ではないのである。

真の教養は、偉大な著作に親しむことによって得るもの。

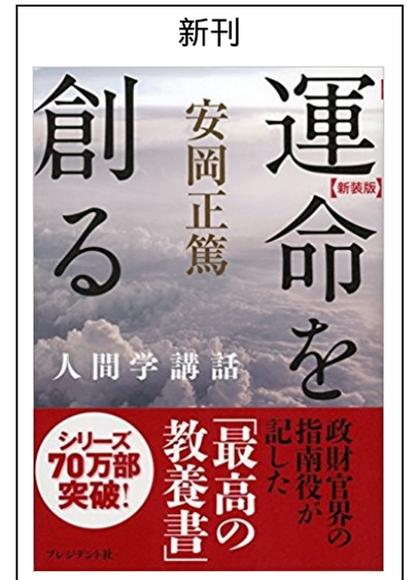
これは専門の知識・技術の書物を調べることは別である。

専門の内外を超越した、人としての修養の書であり、自分に響くような書物であれば何でも結構である。

別に学者になる訳でもないのですから、博学多識の必要はない。

何よりも、絶えずこれを心掛けることが自らの人格を高め、そのみならず、知らず知らずのうちに周りにまで影響を与えもするものなのです。

なぜ、偉大な著作なのか。そこに描かれる人物・言行は、やはり敬するに足るほど魅力的なのである。



書籍「運命を創る」より

大事なことは

立志

人物如何

立志：自身の将来の目的を定めて、これを成し遂げようとする事。

人物：どのような事業にあっても、それを成功と失敗に分かつ根本的な要因は、一にも人物、二にも人物、その組織の最高責任者である人物如何によって決まる。

著者：安岡正篤氏(1898年～1983年)の人物紹介

1945年(昭和20年)8月15日正午、天皇陛下の「終戦の詔書」がラジオで放送された。この「詔書」に最終的に目を通し、手を入れたのが“安岡正篤氏”です。また、元号「平成」の考案者であり、“吉田茂”から“中曽根康弘”まで、歴代の総理大臣の指南番的存在であったことでも知られています。世の中を良くするには、公私ともに優れた人物が必要であるとの信念のもと、その育成に一生を尽くしました。特に、国民の幸不幸は政治の影響が大きいとし、政財官界の指導者層の啓発・教化・指導に力を注ぎ、その教えの基本は、日本の伝統を大切にす立場からの“東洋的な思想・哲学”でした。生前はほとんど表に出ず、知る人ぞ知る存在でした。しかし没後、著書や講演録が相次いで出版され、30年以上たった今でも、己の生き方や国の在り方を真面目に考える人々に熱く支持され、深い感動と人生の指針を与えています。

古今東西の歴史と人物学を極め、透徹した眼で、人間と社会の本質を見抜いた所から発せられる現実の諸問題への的確な指摘は、まさに「活学」であり、その「人物学・人間学」に魅せられて教えを請う人は多数に上っていました。

見識(けんしき)と胆識(たんしき)

大体において、創業者(初代)の人は総じて顕著なことは、『気魄(きはく)』が旺盛であります。これを専門用語で「骨力」といいます(気骨のある人とは、ゆるぎない信念を持つ者)。この『気魄』は、人の根本的要素であり、人格の第一次的要素でもあります。

この『気魄』から生まれる理想を『志』といいます。『志』は、熱烈な理想をもって事に当たるもので、単なる一時的なものでは駄目で、いつも変わらない一貫性、永久性がなければなりません。

『志』からの事に当たる際、様々な問題や障害にぶつかり、心折れたり、くじけたりせずに進むこと、人としてこれくらいを根本になくしてはなりません。ましてや、部下を持つ上司であればなおさらです。

人は、様々な経験から知識ができてきます。単なる知識ではなく、本当の全人格的な人そのものを打ち出すことにならなければいけません。これを『見識(けんしき)』または『識見(しっけん)』といいます。知識のある人ではなく、『見識』のある人にならなければならないのです。

クイズ番組などでいくら解答ができようが、それは知識であって『見識』ではありません。

『見識』とは、その人格、体験、若しくはそこから得た悟りなどによって発せられる判断、考え方のことです。“義”の何たるかを知り、真の“利”を知る者を『見識者』といいます。

そして、事に当たり、様々な矛盾や抵抗に鍛えられ、きびきびした実行力になった時、これを『胆識(たんしき)』といいます。上司は、この『胆識』をもたなければ部下は服従しても心服はしません。

修身・学問によって知識も見識となり、その人独特の存在が意義づけられてくるのです。根本精神から生まれ出る識見、器量、信念、徳望こそが大事なのでありまして、知識云々ではないのです。

『胆識』とは、決断力や実行力を有した見識のことで、それは自分自身の信念に基づいて判断したときに“是”であったならば、如何なる困難があろうとも遂行し続ける強さがあることです。

成功の是非は問いませんが、失敗するとしても、やるべきだと判断したならば実行するのが『胆識』です。ただし、見識を有することが前提なので、無謀であることとは異なります。

人としての本質的要素と付属的要素

人は、4つの要素< 道徳性 習慣(躰) 知識や知能 技術や技能 >から成り立っています。これを要約すると、本質的要素と付属的要素に分かれます。

人としての本質的要素とは、これをなくしてしまうと人が人でなくなるという要素で『道徳性』です。この『道徳性』がないと、不正や虚偽を働いたり、弱いものいじめをしたりして、人の格好をしていても人とは言えないのです。

この本質的要素に準じて大切なのが『習慣(躰)』です。躰とは、良い習慣を身に付けることです。

一方、付属的要素とは、つけたりでもあり、大切なものではありませんが、少々足りなくても人であることに対しては差し支えないもので、これが『知識や知能』『技術や技能』です。

『知識や知能』『技術や技能』に恵まれた人であっても、人としては関心できない人が、今日の社会にはかなりおります。

今日の大企業によるデータ改ざん、行政の障害者雇用の水増し問題や統計データの不正、相撲協会やレスリング協会、ボクシング協会などのスポーツ業界での暴力的指導や不正問題など、これらは人の付属的要素たる『知識や知能』『技術や技能』の問題ではなく、人の本質的要素たる『道徳性』の欠如が根本原因なのです。

自分自身の人格を『見識』から『胆識』へと向上させることで、自ずとトップ(経営者)に相応しい人物になるものなのです。

人間教育を忘れた明治の失敗

幕末の黒船来航により、日本が西洋文明に驚嘆(きょうたん)しました。この驚嘆が恐怖になり、この恐怖は一面において畏敬(いけい)になり、一面において反省になりました。

そこで、何はともあれ、西洋に負けない近代文明を日本が作り上げなければならぬ。何とかして、一刻も早く追いつき、追い越さねばならない状況に追い込まれました。

それには、人材が必要になる。けれども、そんな有能な人材を短時間でつくることはできない。そこで明治政府は、若手で有能な人材をつくるために“大学”を作りました。そして、その大学の予備校として“高等学校”を作り、その予備教育を“中学校”でやり、その基礎教育と初歩教育を“小学校”でやる仕組みにしました。明治の教育は、学校教育を主眼として、その教育内容においては、西洋近代化文明の模倣や再現に役立つ『知識や知能』『技術や技能』を早く習得させる、という制度になったのです。

その結果、学課から“人間を養う”“道徳性を磨く”という、人の本質的要素を身につける教育が付けたりになり、徳川時代の“人物・学問”の教育がなくなってしまったのです。

特に、戦後の学校教育は、『修身・学問』という人間教育が完全になくなり、『知識・知能』や『技術・技能』教育を全力で行っているのです。

大企業によるデータ改ざん、行政の障害者雇用の水増し問題や統計データの不正などの根本問題は、人としての本質的要素たる『道徳性』『習慣(躰)』の教育がなくなってしまったことです。

『胆識』はおろか、『見識』『器量』というものができていない人を多く輩出しているのです。

“法令遵守(コンプライアンス)”や“企業統治(ガバナンス)”の問題ではないのです。

また、今日の政府や行政の対応は、この“解答を知らない”のではなく、“問題が何か”をわかっていないのです。

企業の従業員研修も、人間教育を忘れ、即戦力としての『知識・知能』『技術・技能』教育を全力で行っています。

『我が社に人材がない』という言葉は、どの企業でも共通した表現ですが、“いない”のではなく、“人間教育を全くしていない”のが正しい表現なのです。

大人(たいじん)と小人(しょうじん)

東洋の哲学の中では、人としての本質的要素『道徳性』『習慣(躰)』と、付属的要素『知識・知能』『技術・技能』を対比して、本質的要素が付属的要素よりも大なるを『大人(たいじん)型』といいます。

幕末においては、西郷隆盛が『大人型』で、勝海舟が『小人(しょうじん)型』です。

論語では、『大人は、真っ先に“義”を考え、小人は、真っ先に“利”を考える』とあります。

もちろん、大人型にも小人型にも、ぴんからきりまで様々あります。

ゆえに、『小人型』は使用人であって、上司や経営者の“器”ではないのです。

人間学と大将の器

『名士』というのは無名の間が『名士』であって、いわゆる『名士』になるに従って、メイは“迷う”という『迷士』になる。そのうちに段々に“冥土”の『冥士』になりがちです。本当は、“無名”のときが“有力”であり、“有名”は突き詰めた意味で案外“無力”になるものです。

北条早雲が法師に兵法書の『三略』を講義させました。法師が開巻冒頭に下記内容を読んだところ、聞いていた北条早雲がいきなり「よし、わかった。これで十分」と言って講義をやめさせたそうです。

『夫れ主将の法は、務めて英雄の心を攬り有効を賞録し、志を衆に通ず。』<三略(上略)>

そもそも大将の心得は、統率にあたって英雄の心をとらえることに務めねばならない。有効の者には賞金・俸録を与え、自分の志を下の者に徹底させる。多くの人が望むことに心をやれば、何事も容易に成就し、多くの人を憎むことにも心をやれば、人々は心をこちらに寄せないものはない。

「主将の法は、英雄の心」なのです。つまり雑輩を相手にしてもつまらない。偉い奴の心を“ぐっと握る”ということが大事なのです。つまらない人間のご機嫌を取って、空(から)人気を占めたところで何にもならない。しっかりした偉い奴の心を握って、そして手柄のある者に惜しげもなく褒美をくれてやって、それと同時に、いかに大衆に志を通ぜしめるか、我がなさんとする志を大衆に通ずることが大事なのであります。

『群吏朋党し、各々親しむ所を進め、姦枉を招き挙げ、仁賢を抑え挫き、公に背き私を立て、同位相訕る。之を乱源という。』<三略(上略)>

多くの役人が徒党を組んで、自分の親しい人間だけを推薦して、悪賢こくて曲がっている人間を招き挙げ、同じ地位にある者を誘(そし)る(非難する)。これを乱の源という。

『善を見てしかも怠(おこた)り、時至りてしかも疑い、非を知ってしかも処(あ)る。この三者は道の止む所なり。』

この時機ということを見ながら、これを実行せずに怠る。その時が至っているにもかかわらず、疑って、まだ時機が早いとか、やれ反作用がどうだとか言って、ぐずぐずする。悪いと知りながら、何もせずにしてしておく。この三つがあれば、どうしても進歩が止まってしまう。

人間がどういう素質・才能を持っていて、それがどういう関係でどうなっていくという法則を探って、これを操縦して、人間の人格、人間の生活、人間の社会を創造していくことを“哲学”といい、東洋で言えば、これを“道学”といいます。

我々に一番大切なのは、どんな素質があり、才能があって、我々の修身・学問の如何によっては、どんなに自己を変化させ、どんなに世の中の役に立ち、世界をも変えることのできるものであるということを確認して、決して自分の生活を軽々しくしないことであります。

真剣になって自己と取り組んだら、いかなる運命を打開することができるか、本当に計り知るべからざるものがあるのです。

昔から、お祝いの席の料理に『海老』が出ます。大抵の人は、海老は体が曲がっているから、男女が腰の曲がる老年に至るまで長生きをして、共に添い遂げるとしている。ところが、海老は硬い殻をかぶっているように思うが、生きている限り、いつまでも自分の殻を脱いで固まらない。いつまでも老いない。つねに若さを持ち続けるという意味で、お祝いの席に『海老』が出るのです。

会社に入れば、会社の殻があります。役人になれば役所の殻があり、学者になれば学者の殻があり、その殻の中に閉じこもって、型が決まってしまう、大成ではなく小成に安んじて、安逸に流されて、若朽してしまいます。

これから何かの専門家になって早く楽をしたい、ということを考えていると、非常に早く人間が限定されてしまう。限定されると、麻痺沈滞し、やがて進歩が止まってしまう、つまらない人間になる。

人間は、本を読まなくなると頭がきかなくなってきました。人間が俗になってきます。そこで、絶えず有益な書物を読まなければならないのです。

世界の優れた人々が結論を同じにしているのが、結局のところ、国家であろうが、会社であろうが、その将来の運命を決定するものは、その集団、その組織に参加する個人個人が自己を磨いて、その磨かれたる自己を以って、いかにその集団に参加し、その影響を受け、また、それに影響を与えていくかにあるのであります。